

シンポジウム4

大坂蘭学発祥の背景

小石 秀 夫

大阪市立大学名誉教授

大阪の蘭学史について纏ったものとしては、昭和三年（一九五七）の医譚に掲載された中野操氏の「大

阪蘭学史」がある。大阪の蘭学の始まりを橋本宗吉を中心とした時代（一七九〇—一八三六）と、緒方洪庵を中心とした時代（一八三八—一八六〇）に分けて考察し、洪庵が蘭学発展に大きな業績を挙げたのは間違いないが、彼を大阪蘭学の開祖とするのは誤りとし、その前の橋本宗吉が大阪蘭学勃興期の中心人物とした。

昭和五四年（一九七九）刊行された中野氏の「大坂蘭学史話」では、先駆者として永富独嘯庵、麻田剛立、間重富、小石元俊を挙げ、大坂蘭学発展の主要人物として関西ではじめてオランダ語を勉強した橋本宗吉、

これをめぐる人々に、伏屋素狄、大屋尚齋、斎藤方策、各務文献、中川元吾、藤田顕蔵があり、これらの業績の後を継ぎ、更に発展させたのが緒方洪庵であるとした。最後に、これらの蘭学者を経済的その他で支えた知蘭派として、木村兼葭堂、山片重芳、山片蟠桃、中井履軒、中伊三郎などの町人、学者を挙げている。これは大坂への蘭学の浸透、発展、盛衰を、医学の面から詳しく綴られたものである。

一方、平成元年（一九八九）には、「オランダフェスティバル'89大阪」実行委員会により、「大阪とオランダ」という小冊子が刊行された。これは慶長五年（一六〇〇）オランダ船リーフデ号が大分県に漂着して以来現代に至る日蘭の交渉の歴史が、六章に分け記述されている。三章「大坂の蘭学」の一「大坂蘭学草創のころ」を有坂隆道、上田譲の両氏が書いているが、ここでは大坂蘭学発展の受け皿として、当時の大坂の学風より検討し、享保九年（一七二四）大坂の町人により設立された学塾懐徳堂での学習により、格物究理と合理主義が一体となった親試実験主義の精神が、町人

の生活に育まれたとした。ここで中井履軒等に学んだ麻田剛立は、医業の傍ら天文学の研究に没頭した。一方、高橋至時、間重富、山片蟠桃等を育てたが、彼らには蘭書を読解する能力はなかったもので、間重富は親友の蘭方医小石元俊と計り、大坂の傘屋の職人橋本宗吉を見いだし、両人が資金を提供して寛政二年（一七九〇）頃江戸の大槻玄澤の元に送りオランダ語の学習をさせた。彼は帰坂後、オランダの医書、天文や地理学など多くの翻訳をした。また彼は直接蘭書によってオランダの学問を学ぶという意味で、大坂の蘭学の祖といえるとした。その門人に伏屋素狄、中川元吾、斎藤方策、中天游等がある。更にこの学風を受け継ぎ、更に発展させたのが、緒方洪庵である。次の章二「緒方洪庵と適塾」（梅溪昇）に詳述されている。

「大坂の蘭学史」を考える場合、その検討すべき範囲がきわめて広い。当時の大坂の蘭学発展を支えた町人文化のレベルの高さが、注目される。